編　集　後　記

徳島赤十字病院　放射線科部　赤　川　拓　也

2020年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が社会と人々の生活に急速に変化をもたらした激動の年でした．そして，後の世界史に深く刻みこまれるほどその影響が今なお継続しているのは皆さんご承知の通りです．

１月に国内でCOVID-19が確認されて以降，４月の緊急事態宣言の発令，７月の東京オリンピック2020の延期など，その影響は計り知れません．また，自粛生活の浸透にあたってリモート飲み会やテレワーク等が普及し，働き方改革以上に働き方が大きく変わってしまいました．リモート会議などの環境が整うにつれて，Webで開催される研究会や学会も多くなり，参加の在り方も変化しました（反面参加しやすくなりました）．

一方で，ソーシャルディスタンスが叫ばれてからは物理的な人と人との距離だけでは無く，精神的な距離も離れるかに思えました．しかし，全国の建物などを青色にライトアップして医療従事者を応援する「MAKE IT BLUE」活動や，人々が心をひとつにする願いを込めてオンラインで全国一斉に日本酒で乾杯するイベント，悪疫退散を祈願し笑顔になってもらうようにと全国の花火師たちが一斉に花火を打ち上げるなど，前例のない形での人と人との繋がりを感じるエピソードも多々ありました．

今，世界中の教育研究機関や企業，民間の一個人までもがCOVID-19の影響に対して，研究，調査，対策など出来る範囲でフルに稼動しており，科学は最大限に努力しているといわれています．まさに人類が英知を結集してこの世界規模の困難に立ち向かっているといえます．今回，本医学雑誌も第26巻となり，現在まで徳島赤十字病院の英知を押し広げる重要な役割を担ってきました．投稿数27件と多数ご寄稿いただきまして編集委員として感謝を申し上げます．

最後にCOVID-19の感染拡大の終息を祈願するとともに，アカデミックな紙面において精神論を持ち出すのは野暮ではありますが，過去我が国において国難が襲来した際に先人が愛誦し，いっそう奮起努力したといわれる一文を紹介して編集後記とさせていただきます．『世，汚隆無くんばあらず．正気時に光を放つ．』

藤田東湖　作「文天祥正気の歌に和す」より一部抜粋